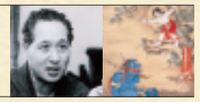

江戸時代・18世紀中期　紙本著色　169.8×124.8cm　三重県松阪市継松寺蔵

CHRONICLE OF MIE VOL.3
【美術編】

# 曾我蕭白「雪山童子図（せっせんどうじず）」

江戸時代の異端の画人、曾我蕭白。
遊歴した伊勢地方などには
その破天荒な行状を伝える逸話が残る。
作品も特異な美意識に貫かれ、
荒々しい筆致や極彩色の色使いなどは、
現代人の心にこそ迫ってくる。

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

蕭白と云う画師来ル是モ柳屋へ入込ミしが余り異形のふるまい故いかふはやらず

『宝暦咄し』（文化8年刊）

松坂の豪商森壺仙（もりこせん）（1743〜1828）が晩年になって往時の松坂を振り返って著した追想『宝暦咄し』の一節である。ここに登場する異形のふるまいをみせる蕭白という男、今回取り上げるのは彼が描いた画である。

『宝暦咄し』は、蕭白＝曾我蕭白（1730〜1781）の異形ぶりを具体的に描いていないが、その破天荒な行状を語る逸話には事欠かない。

例えば、久居藩での出来事。毎日酒を飲みごちそうを食べては寝ていたが、しびれを切らした藩から迫られると、金屏風を持ってこさせて、墨に紺青や群青など高価な絵の具を投げ込んで箒にたっぷりつけると屏風に湾曲した一線を描いて勢い余って家老の顔まで塗ったまま、飄然と去っていった。乾いた屏風には、七色燦然と輝く虹が出現した。

松坂近郊でのこと。豪農が外出の帰り、道端で頭陀袋を投げ出して倒れている男を見つける。もはや空腹で歩くこともままならないので寝ているという男を連れ帰ったところ、数ヵ月も徒食したあげく、襖絵を描いて去っていった。

鈴鹿の某寺でのこと。本堂の縁に風体怪しい男が寝ている。夕刻になって追い立てようとしたところ、俺は画師だが、腹が減って動けないので寝ている。画師といっても信じてもらえないだろうから、そこにある白い衝立に描かせてくれ。ついてはまず酒一升を飲ませてくれ…。

まるでゴッホを想い起こさせるような、酒浸りの無頼の画家がここにいる。この逸話はいずれも、桃沢如水という明治の画家が三重県内をくまなく歩いて採取し、まとめた論文「曾我蕭白」（『三重県史談会会誌』1909〜10年）からとったものだが、この論文はさながら蕭白の破天荒行状記の様相を呈して面白い。

さて冒頭に引用した一文に戻ると、蕭白は松坂で、柳屋という旅館に入り込んで画会を開いたものの、あまりの奇行ぶりが祟って、一向に絵を求めるものが現れなかった。文中に「是も」とあるが、蕭白の前に狩野縫之助という画人が画会を開いたことをさす。彼は京の名門狩野家の若様だが、その画会は、差し詰め、人気アイドルタレントの地方公演のような趣だったに違いないから、その後ではいかにも分が悪い。

この一向流行らなかった画会であったが、なかには奇特な人もいないではなかった。実は、今回紹介する「雪山童子図（せっせんどうじず）」は、この画会で描かれた画であることがわかっている。注文主は同地の商人村田彦左衛門。その子孫が19世紀初めに継松寺（松阪市）に寄進して現在に至っている。

画題の雪山童子とは、釈迦が前世において雪山で修行していた時の名で、自らの身を与える代わりに鬼から無常偈（むじょうげ）を教えてもらうという釈迦前世の物語＝仏伝に題材を得ている。釈迦の前世譚を描いた画題が寺に相応しいという理由で寄進された。

どぎつい色彩の不協和音は、調和の美など歯牙にもかけない蕭白独特の美意識を遺憾なく映し出している。フォービスムや表現主義を経験した現代人には、違和感より、むしろ親しみすら感じさせるのではないか。

**曾我 蕭白** そが しょうはく
1730年〜1781年

江戸時代中期の画人。享保15年（1730）、京都に生まれる。青年期から壮年期にかけて、伊勢や播州地方で旺盛な作画活動を続けた。主題としては、花鳥・走獣、仙人や中国の故事など伝統的な画題を扱いながら、その画風は、荒々しい筆致や、けばけばしい彩色など、主観と個性を前面に打ち出したきわめて特異な作風がその特徴となっている。

『竹林七賢図』（部分）。久居藩の虹の屏風は現存しないが、松坂近郊の豪農の襖絵は、現在三重県立美術館に所蔵され、重要文化財に指定されている。全44面にわたって水墨で描かれる。図は、そのうち「竹林七賢図」。賢人たちの野卑な笑いに正統を揶揄する異端の精神がうかがえる。（旧永島家襖絵 三重県立美術館蔵）

『松鷹図』（部分）。「竹林七賢図」と同じ襖絵の一つ。鷹の細緻な筆技と松の荒々しい筆捌きの対比に蕭白の技量の振幅の広さがうかがえる。（旧永島家襖絵 三重県立美術館蔵）

『達磨図』。鈴鹿の寺で衝立に描いたのは水墨の達磨であった。眼があまりに怖いので子どもが突いて破ってしまったと如水の文は続く。確かに修理跡がみられ、拙劣な修理のため、蕭白画特有の眼力を失っている。（鈴鹿市 安養寺蔵）